

旭川大病院ニュース

題字は吉岡前病院長
〔編集〕
旭川医科大学医学部附属
病院広報誌編集委員会
委員長
小川教授（麻酔科）

年頭にあたって

病院長 鮫島夏樹

明けましておめでとうございませう。昨年は昭和天皇の崩御に始まり、ベルリンの壁の消滅に象徴される東ヨーロッパの自由化の波のうちに過ぎるといふ世界的に文字通り激動の一年であり、何か今世紀が総決算されるように実感された一年でありました。



医療については、昨年は我が国でも生体肝移植が行われました。欧米では医療として既に定着している臓器移植が、先進国のうちひとり我が国だけが未だに一般的に合意が得られず、行うことが出来ないという特異な現象も、今後恐らくなくなっていくことでしょう。臓器移植や人工臓器、あるいは遺伝子工学の医療への応用などに見るように、医療技術が次第に生命現象にも手を加える様な発達を遂げた現在、生命倫理に関する新たな問題が生じてきましたが、同時に人々の疾病観も変わり、医療に求められる要求も多様化してきました。アメリカにおける如く、我が国でも "informed consent" が盛んに言われるようになりましたが、医療は決して契約ではなく、医の原点は仁（人間愛）にあり、それを基盤にした informed consent でなければ正しい医療とは言えません。

本道の医療事情で一番目につくことは、看護婦さんの不足であります。このこ

とはもともと、これからの高齢化社会に備えて我が国の看護婦さんの絶対数の過少に起因することかもしれないが、本道の地域医療計画に基づいて病床数が規定されたために昨年度とくに都市部の病院に於いて所謂「かけこみ増床」が目立ち、かえって本道の医師数・看護婦数にみられる医療配分の較差が、札幌や旭川などの都市部と地方地域とで益々広がるといふ結果を招きました。こうした急激な病床数の増加によって、それに見合う看護婦さんの争奪戦が起こり、本院もその影響を直接受ける結果となりました。そのため院内各部門の中では従来より少ない看護婦さんの人員配置で大変苦労された所もあつたことと思います。本年はかかることのない様昨年から種々対策を練ってきましたが、本道の事情が急には変えることは考えられず、今後とも看護婦業務のあり方の見直しを改めて合理化に努めなければならぬと考えています。

今年からいよいよオーダリングが始まり、病院電算化の第一歩が踏み出されることになりました。昨年から本格的に準備を始め、暮近い二十五日にやっと各部門への端末機の据え付けが終わるまでの間、院内の態勢固めから講演会、講習会、実習、頻回の打ち合せなど、ここまでに来る牧野医療情報システム企画室室長はじめ企画室のメンバーの方々、医事課の方々の御苦労に感謝します。申すまでもなく、医療情報化はこれからの病院運営のみならず、診療や研究に必須の要件となりました。残念ながら本院では開院時は未だかかる情報時代の到来が予想されなかつたこともあり、部門によっては端末機などの設置場所にも大変苦労があつたことと思います。文字通り、『古い革袋に新しい酒を盛る』のたとえの如く、これ

からも派生することと思われる種々の問題を克服して、オーダリングを軌道に乗せていって頂きたいと願っています。

昨年輸血部が認められ八月からすでに機能しており、また現在建築中のMRIの建物も三月二十日に完了して四月からは始動されるはこびになりました。懸念の卒後研修カリキュラムの改訂も、各診療科、中診の協

力により三月中には完成の予定で、新しい時代に向けての卒後教育のマニュアルとして活用されることを願っています。

今年も大病院として、悔のない一年が過ごせますよう希望しています。

医療情報 システム企画室室長 牧野幹男

あけましておめでとうございませう。

本院において一九九〇年という年は、いわば医療情報元年とも云うべき記念すべき年になると思われまふ。昨年末、多くの関係者の努力によって、二六〇台の端末、一三〇台のプリンターの配置とネットワークとの接続がほぼ完了し、本年一月四日の仕事始めには利用者カードが皆さんのお手許に届けられました。端末の電源を入れると画面が展開されることに気付かれたことと思います。いよいよ始まりです。約一ヶ月間の練習期間を経て、二月中には本稼働に入る予定です。各診療科、NSの端末利用指導者を中心に充分習熟され



るようお願いいたします。最初は処方オーダー、外来での患者予約、入院患者登録の三つが主体ですが、これから約六ヶ月毎に病名登録、臨床検査等々のプログラムが連続して展開されることになり一段落するまでには二、三年を要するものと思われまふ。その後もハードウェア、ソフトウェアの進歩に伴って改良、改善が将来にわたって果てしなく続くものと想像しています。その理由は、医療情報システムは単に病院業務の合理化、迅速化のみを目的としたものではなく、最終的には医療そのものへの支援（診断、治療計画、医学教育・研究）を目標にしているからです。その医療支援システムがある程度具体化されるには少くとも四、五年を要するものと推定しています。

さて、実際に端末の画面に向つてある業務を行う時、最初に感じられることは手順が複雑でかなり面倒だということではないかと思ひます。たしかに口に甘くて飲みやすいものではないかもしれませんが、私達が長年行ってきた慣れ親んだやり方を棄て、

全く新しい方法で行う訳ですからかなりの苦痛を伴うことは容易に想像されます。プログラムで多くの機能が実行される様に要求すれば、それだけ手順が複雑になるのは止むをえないことです。手順が一つなら一つの仕事しかできないでしようし、十種類の仕事をさせようとすれば、少くとも十の手順が必要になるのは自明の理です。コンピュータは所詮機械ですから機械的制約もありますし、ソフトウェアの開発も充分満足できる程でないことも事実です。その代り私達が日常業務の中で、多忙のため行うことをためらっていた計算、集計、配列、選択、記録などはコンピュータのもっとも得意とする領域です。二月からの本稼働開始からしばらくの間は相互に不慣れなため混乱のあることが予想されます。混乱がでるだけ少くなるよう事前に充分練習されるよう再度お願いをします。

本院には残念ながら医療情報部門担当の専任職員は配置されておりません。システム企画室はそれぞれ本務をもった少数の職員で構成され、円滑な運営を目指して努力していますが、目下の多忙のためあらゆる局面に対応しうるかどうかの不安もあります。職員のみ

診療科紹介 第三内科

第三内科は消化器病を中心にして、代謝、血液、心身症をおもな診療分野としています。外来は水曜・土曜が新来および再来日で、月曜・木曜が再来のみの日です。消化器症状で初診する人は、たいいてい朝食をぬいて受診するので、その日のうちに腹部超音波検査、上部消化管X線検査(バリウム検査)、肝機能検査など必要な検査が行われ、次の日に消化管内視鏡検査を実施するといつたり方方がルーチンになっています。患者には診断の結論が早いと喜ばれています。



入院病棟は七階東病棟にあり、四八床で年間三八〇〜四五〇名が入院します。最近では開院以来数回以上の入院を繰り返す人が増えてきました。それは肝硬変に合併した食道静脈瘤の硬化療法、肝癌のTAE療法、エタノール注入療法などにより、従来は治療困難が手なさんの自主的な努力に期待せざるをえません。

術士か方法のなかつた人達が、進歩した方法で時々入院治療を受けながら社会生活を続けているからです。また慢性肝炎のインターフェロン療法がそれなりに有効と確認され、繰り返し行われるようになりました。消化

にたいする拡張療法など、この分野の進歩を先取りしてきた実績・豊富な診療経験をもちに新たな工夫が積み重ねられていた。診断面でも従来の方法と同時に超音波内視鏡、電子内視鏡、食道内二四時間pHモニタリングなども駆使し、診断の精度向上に努めています。これは同時に治療効果判定の精度を高めることにもつながり、薬剤治療法選択の面でも活用されています。胆石症にたいする衝撃波結石破砕装置による治療も関連病院で行っています。昨年十月旭川で行われた第二一回日本消化器病学会大会(会長並木正義教授)で、学会担当の忙しさにもかかわらず、第三内科からの発表が会長講演、シンポジウム、一般講演など二四演題に及んだことにも診療・研究面での充実、そのための教員員の意欲と努力のほどがうかがわれます。

家族性高コレステロール血症にたいするLDL吸着療法は関連病院で早くから行っています。白血球、悪性リンパ腫、骨髄腫、貧血などの血液疾患の診療はこの二年間で著しく充実し、依頼患者の増加に入院が追いつかない状況のなかで頑張っています。

あちこちの病院を受診しても良くならず不安感を抱き、医師・医療不信に陥って各地から当科を受診する患者も多く、こういう人達には並木正義教授以下教員全員がきちんとした診察・検査と同時に心身医学的アプローチを心がけています。

心身症患者の診断と治療は主として外来で行っていますが、神経性食思不振症などが必要に応じて入院させ、心理療法を含む本格的治療を行っています。

現在の第三内科では研修医など卒業一年目の医師一二名、関連病院や基礎医学で四年以上修業を積んで戻ってきた卒業後四〜一〇年の医師一九名、教官一〇名が診療にあたっています。第三内科の診療では検査、治療、教育どの面においても看護婦さんの協力が強い支えとなっており、いつも感謝しています。

(助教 高杉佑一)

【薬剤部】 新薬紹介(18)

プラバスタチンナトリウム (メバロチン錠・細粒)

高脂血症は多様な病態であり、動脈硬化性疾患の重要なリスクファクターであることから、治療薬に關しては確実な効果と長期投薬されることから安全性の高い薬剤の開発が望まれております。

生体内におけるコレステロール(Ch)はアセチルCoAから多数の中間産物を経て合成されますが、3-ヒドロキシ-3-メチルグ

ルタリルコエンザイムA(HMG-CoA)からメバロン酸になる反応を触媒するHMG-CoA還元酵素がCh合成の律速酵素であります。

本剤は、Penicillium citrinum、Monascus ruber等の微生物が産生するCh生合成阻害活性を有する物質の研究の過程で見出されたものであります。化学構造式的にその一部が、HMG-CoA還元酵素の基質であるHMG-CoAの構造と類似しているため、HMG-CoAと拮抗し、HMG-CoA還元酵素を特異的かつ拮抗的に阻害し、血中Chを速やかに、持続的に低下させ

作用機序を有する薬剤であります。この作用はCh合成の主要臓器である肝臓や小腸のCh合成を選択的に阻害し、ホルモン産生臓器を含む他の臓器での阻害は非常に弱いと言ふことであります。それにより、肝全体のChプールが減少することから、肝細胞のCh需要を高め、結果としてLDL（低比重リポ蛋白）―受容体を増加させ、血中よりLDL-Chの細胞内取り込みが亢進し血中Chを低下させます。



高脂血症治療剤はいろいろな分類方法がありますが、結果として、総Ch、LDL-Ch、HDL（高比重リポ蛋白）―Ch、TG（トリグリセライド）に対する作用を指標にして、比較分類されております。本剤は、総ChとLDL-Chを著明に低下させ、HDL-Chを上昇させることが確認されております。その臨床効果ですが、血中総Chは一日10mg投

与で16%、20mg投与で21%低下、LDL-Chは10mgで24%、20mgで30%低下、HDL-Chは13%上昇したとあります。また投与前の検査値が高いほど、総Chの低下率、TGの低下率が高く、投与前値が低いほど、HDL-Chの上昇が高値であったと報告されております。こうしたCh値に対する効果を有する薬剤として、現在広く用いられている薬剤にはプロブコールやコレステラミンがあります。前者は、総Chを減少させるもの、同時にHDL-Chも低下させます。また陰イオン交換樹脂である後者は、本剤と同程度のCh低下作用、およびHDL-Chの増加作用がありますが、服用量の関係でコンプライアンスに問題があると言われております。こうした問題を解決した製剤が本剤と言えます。

効能・効果は高脂血症、家族性高コレステロール血症となっております。

用法・用量は一日10mg、2回分服で、重症の場合は一日20mgまで増量できます。副作用の発現率は全例の2.8%、臨床検査値異常は全例の6.2%に認められていますが、発疹、じん麻疹、下痢、胃部重圧・不快感、腹痛、全身倦怠感、およびGOT、GPT、CPK等の上昇が主なものとなっております。

診療科紹介

精神科神経科

精神医学講座は、昭和五十一年四月に森田昭之助前教授の就任によって創設されました。昭和五十三年九月には現宮岸 勉教授に引き継がれ、診療、教育、研究面においてますます精力的な活動が展開されております。精神科神経科の診療は、昭和五十一年十一月の旭川医大附属病院の開院と同時に開始されました。現在は、宮岸教授以下十九名の医師により、各種の精神神経疾患に対して積極的に取り組んでおります。主な対象疾患としては精神分裂病、躁うつ病、神経症、器質性精神ります。

以上、本剤は最も血中Ch低下作用を発現する薬剤の一つであります。血中Ch値と心筋梗塞などの循環器疾患との因果関係が明確になつてきている現在、本剤は重度の高脂血症患者には極めて有用な薬剤として需要が高まるものと思われま

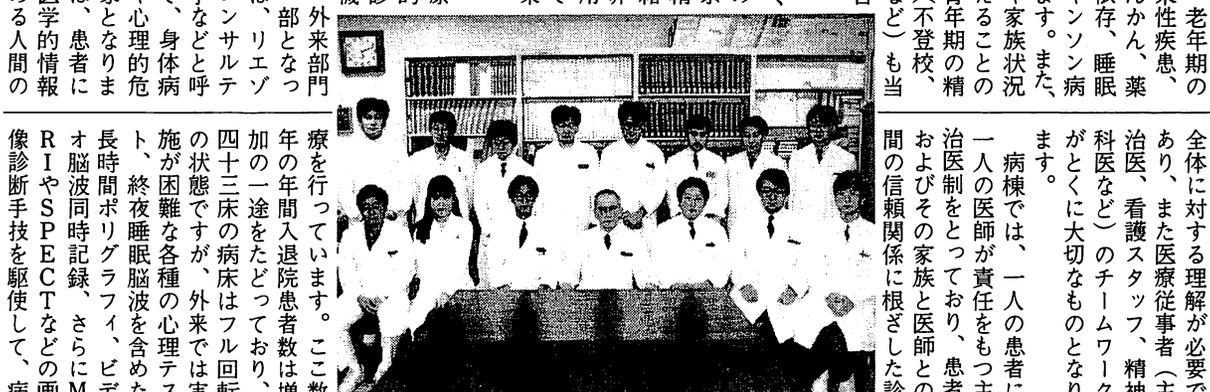
す。さらに、コレステラミンおよびプロブコールとの併用療法など、作用機序的にも相乗的と思われる薬物治療が可能であると考えられます。

(薬品情報部長 藤田育志)

病、老年期の痴呆性疾患、てんかん、薬物依存、睡眠覚醒障害、パーキンソン病などがあげられます。また、現代の社会状況や家族状況と切り離して考えることのできない児童・青年期の精神医学的な問題（不登校、摂食障害、自殺など）も当科の診療対象に含まれます。

外来診療は火、木、土曜日ですが、必要に応じてその他の曜日にも診察時間を設定し、精神療法のほかに箱庭療法のような非言語的な方法を用いた治療も行っており、着実な成果を上げています。

ところで、最近、他の診療科で治療中の患者の精神的な問題に関して診察を依頼される機会が増えており、外来部門の重要な仕事のひとつとなっております。これは、リエゾン精神医学とかコンサルテーション精神医学などと呼ばれる分野で、身体病



患者の精神障害や心理的危険などがその対象となります。診療場面では、患者に對する詳しい医学的情報のみならず、病める人間の全体に対する理解が必要であり、また医療従事者（主治医、看護スタッフ、精神科医など）のチームワークがとくに大切なものとなります。

病棟では、一人の患者に一人の医師が責任をもつ主治医制をとっており、患者およびその家族と医師との間の信頼関係に根ざした診療を行っています。

近年、欧米諸国では精神障害をもつ患者を地域のかで治療ないしケアする地域精神医療が発達し、わが国においても、それぞれの地域の実情に則した活動がなされていきます。旭川市では、本学附属病院、市内の各精神科診療施設、旭川保健所などがネットワークを形成し、訪問指導、共同作業所や職親制度の導入、市内合同レクリエーションの実施など、実にさまざまな角度から患者ひとりひとりの状態に応じた社会復帰対策が着実に講じられています。

以上、当科における診療活動について簡単にご紹介致しました。今後、精神科医の役割は従来にも増して多様化するものと思われま

すが、宮岸教授の指導によつて、新しい精神医学が着実に築かれていくものと考えております。

(講師 千葉 茂)



病院で働く人々

木工・機械印刷工・作業員

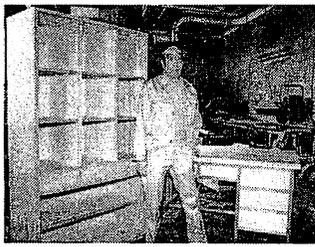
「目立たないが重要な仕事をしている人々」、病院の機能が十分に発揮されるようこれを陰から支えて下さる人々（昭和五十九年一月十五日付「病院ニュース」第一号「病院で働く人々」の序文）が紹介されてから今回で二十回目となります。

今回は勤務の場所が病院内に無いことから、ふだん病院との関わりに気づく事の少ない業務の木工、機械印刷工、作業員を紹介します。

木工

電動のこぎり、電動カンナ、ドリル等に囲まれて文字どおりもくもくとして製品を作っているのが木工工作室です。スチール製品が主流を占めるようになった今日でも木の温もりを求めて木製品の製作希望が多く寄せられており、年間一〇〇種ほどのものを製作しております。

申込みが多かったのはカナルテ棚、フィルム棚、本棚、机類などですが、この他にも食器棚、作業台、実験台等も多数作りました。しか



尾崎 芳幸

し、型は似ていても同じ規格の製品は二つとなく意外に時間の要する仕事となっています。今までに製作した物でユニークなものは、94cm x 52cm の「猫の爪研ぎ板」でした。気の張る仕事の中で一時気の休まる注文でした。

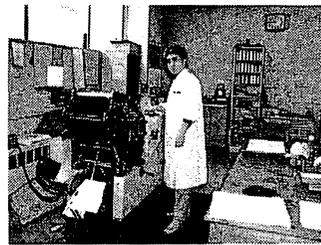
最近では食器棚、本棚等に、デザインに凝った作りを希望する人が多くなり、腕前発揮の時期到来と張り切っておりますが、使用材料に制約があり残念ながら職人芸を十分に発揮することができません。しかし、デザインの凝ったものは時間がかり過ぎ、他の申込者に迷惑がかかりますのでほどほどに……。

これからも皆さんに永く喜んで使ってもらえるものを心を込めて作りますのでよろしく願います。

機械印刷工

学内で一年間に使用する各種印刷物のうち本学の印

刷室で印刷されるのは年間二五〇〇種九二万枚にもなります。これらの膨大な印刷物を遅滞なく処理しているのが印刷室です。この内、病院で使用されるカルテ用紙の印刷は実に三九万枚にもなります。この他、病院内で使用する用紙にはX線フィルム借用書、検査説明書、アンケート用紙等があり七



田辺 文男

万枚程度印刷されていますので、合計枚数四六万枚は本学の全印刷数量の半分を占めております。

これらの印刷には現在二台の印刷機（ゲステットナー二二二型、三二二型）で行っております。なかでも三二二型は昨年三月に更新された最新鋭の機種で従来より鮮明な出来上がりとなつています。

学生の期末試験問題の印刷時期には部外者入室禁止となりご迷惑をかけますが、これからもより良い印刷を心掛けるつもりでおりますので御協力願います。

作業員

夏は芝刈り、清掃、冬は除雪と年間を通して大学周辺の環境の美化・保全に努めているのが作業員です。開学当初は三名おりましたが、現在は一名となり五月から十月までの間は旭川市シルバー人材センターからの派遣を受けて芝生の保全、周辺の清掃に努めております。又、冬期は請負契約作業員二名と共に通路、玄関口等の除雪を、時には早朝五時頃から行うこともあり患者さんや職員の通路の確保に努めております。



布子 博

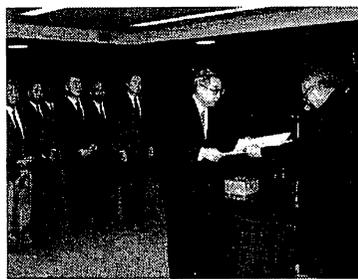
芝刈機や除雪機にとって大敵なのが清涼飲料水等の空カンです。機械を損傷させる他、破片が歩行者、車両等に当たる恐れもあり芝

生、通路上には捨てることのないように十分注意願います。これからも構内の環境維持に努めますのでタバコの吸殻、ゴミ等を捨てないよう御協力願います。（会計課用度第一係）

永年勤続者表彰式

行われる

（俊一氏）に学長から表彰状及び記念品（銀杯）が授与されました。



永年勤続者表彰は、各国立大学等において永年良好な勤務成績で勤務した職員に功労をたたえるため、所轄機関の長が表彰状を授与して実施されておりますが、

次いで、下田学長から「本学創立以来、それぞれの立場で職責を全うされ、本学の発展・充実に貢献された」として、被表彰者及びそのご家族に対し感謝の意が表せられました。続いて、被表彰者を代表して吉岡 一氏（小児科学講座教授）から「創立以来、本学の歩みは必ずしも平坦な道ばかりではなかったが、それぞれの立場で困難を克服してきた。今日の表彰を励みとして、今後も努力と精進を続けたい」旨謝辞が述べられました。

式終了後、午後五時から病院職員食堂において祝賀会が開催され、永年を祝する思い出話を和やかな懇談のひとときを過ごしました。（庶務課）



式終了後、午後五時から病院職員食堂において祝賀会が開催され、永年を祝する思い出話を和やかな懇談のひとときを過ごしました。（庶務課）